

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

「なんだろう その先へ」～光遊び～／レイモンド川崎保育園（神奈川県）

日頃子どもたちと遊ぶ中で、不思議を共に感じたり感動したりすることはありませんか？

今回の事例は、段ボールハウスをきっかけに異年齢の子ども同士やその周りにいる大人が自然に関わりあい、試したり考えたりして、「科学する心」を育てていった事例をご紹介します。「なんだろうその先へ」と子どもたちが探究しています。



光を感じて（5月）／4歳児

クラスで段ボールの家を作った。穴を開けてセロファンを貼り、懐中電灯で照らす。最初は園の携帯電話のライト。次は懐中電灯で照らす（図1）。乳児も興味をもち光を追いかけて触ろうとする（図2）。段ボール箱の中で光が散りばめられる様子を、Aさん「花火みたい！」（図3）。



図1:携帯電話のライトで照らす



図2:興味をもつ乳児



図3:花火と表現

Bさんは、懐中電灯やライトを使い、影が壁に映るのを見ている（図4）。

段ボールハウスの中にトレース台を設置すると、手をかざす子どもやトレース台をひっくりかえして裏を確認する子ども、トレース台の真上にあった天蓋を見つめる子ども、トレース台の端からも光が出ていることに気づき、持ち上げてダンボールハウス内にかざす子どもなど、それぞれに光に関わる姿が見られた。

また、スマートフォンのライトを手にトレース台にかざすと、「ほら、火だよ」「あつだよ」などの言葉が発せられた（図5）。

段ボールハウス内におまごのおもちゃを持ち込んだ子どもがいたためか、食材のおもちゃが落ちており、CさんとDさんがその食材をトレース台に乗せて、バーベキューに見立てる。「あちち!」「もう焼けた?」と対話生まれる。

しばらくすると、「あ、海!」と声があがる。たまたま足元にあった絵本バッグの紙のシワに懐中電灯の光があたり、段ボールハウス内に揺らめいた光が映っていた。

「エビだ」と今度はその絵本バッグを直接懐中電灯で照らしてみても、段ボールハウス内に影を映す（図6）。紐の部分がエビに見えたようだ。Eさん「エビどこ?」と影に気がつかず、絵本バッグの中を直接のぞくが、わからない様子。すると、Dさんが、「違うよ」「こっち」と伝える。しかし、この時は分からなかった。



図4:壁に映る光



図5:トレース台の光遊び

